

一

次の――線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- 1 必要な量は自ずから決まってくる。
- 2 会釈して通り過ぎる。
- 3 時化のため魚の入荷が少ない。
- 4 母は呉服屋で反物を買った。
- 5 賛成か否かをはっきりする。

二

次の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 問題解決はヨウイではない。
- 2 ホウドウ陣に囲まれる。
- 3 フクゾウのない意見を聞きたい。
- 4 ゴツカンの地へ旅に出る。
- 5 拳手により決をトる。

三

次の俳句の空欄に当てはまる表現を後から選び、記号で答えなさい。

- ① 「 庵は破らず夏木立 いおり
- ② 「 歌申し上ぐる蛙かな
- ③ 「 ふたみにわかれ行く秋ぞ
- ④ 「 果てはありけり海の音
- ⑤ 「 猿も小叢をほしげなり みの

ア 蛤の はまぐり イ 手をついて ウ 木啄も きつつき エ 木枯らしの オ 初時雨

四

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

雑誌の占い特集や自己啓発書などでしょっちゅう目にする「本当の自分」という言葉。これとセットになっているのが、「個性」である。そして、個性とは、一人一人の「個人」に特徴的な性質のことである。

私たちは、自分の中に、何人かとは違う個性的なところを見つけないと願ひ、人に左右されず、その個性を大切にしたいと思っている。

あ

一体、個性とは何なのか？

文部科学省（当時の文部省）の中央教育審議会で、「個性の尊重」が明確に目標として掲げられるようになったのは、一九八〇年代前半のことである。七五年生まれの私が小、中学生になったころには、教育現場でも、やかましいくらいに「個性を伸ばせ」、「個性的に生きなさい」と言われていた。

私が属する団塊ジュニア世代は、そもそも人数が多く、受験戦争も激化の一途を辿っていたので、詰め込み式の画一化教育からの脱却という問題意識自体は、真つ当だったと思う。しかし、年がら年中、念仏のように聞かされていた「個性」という言葉は、まったくもつてうつとうしかった。

い

そもそも、個性的に生きろと言われても、その年頃の子供は、何をどうして良いのかわからない。みんな同じ制服を着て、朝から夕方まで、同じカリキュラムに従って勉強している。部活動でもすれば、個性的ということなのか？ 仕方がないから、髪型に凝ってみたり、制服を改造してみたりすると、それは個性を履き違えている！と、職員室に呼び出されたりする。

個性というのは、実のところ、誰にでもある。まったく同じ人間は、この世の中に二人とない。ものの見方から感じ方、考え

方まで、十人十色である。そして、際立つて個性的である人は、社会との軋轢あつれきも大きくなる分、苦しむことも多い。自分は周りから浮いてると感じる人は、むしろ平凡さにこそ、憧れるものだ。

う

結局、教育現場で「個性の尊重」が叫ばれるのは、将来的に、個性と職業とを結びつけなさいという意味である。自分のやりたいことを見つけなさい、努力して夢を実現しなさい。社会に出て、自分のしたい仕事をするこそが個性的に生きる、という意味だ。自分の個性を発揮するのは、まさにその時である。……

とはいえ、自分のしたいことが、そんなに簡単にわかるわけがない。若いのに、夢も目標もないのかと言われるが、職業の多様性は、元々は、社会の必要に応じて生じたもので、色々な個性の人間がいるから、それを生かせるように多様な職業が作られた、というわけではない。手紙を届けるのが得意な人がいるから、郵便局が作られたのではなく、手紙のやりとりが必要だから、郵便局が作られ、そこで働く人が求められているのである。そして、^②職業の多様性は、個性の多様性と比べて遥かに限定的であり、量的にも限界がある。

繰り返すが、個性は誰にでもある。問題は、職業とのマッチングである。それがわかりやすい人はいいい。しかし、漠然とした自分の個性が、一体、何の職業とへ A V 的なのか、なかなか見えにくい人もいる。何かをしたいという気持ちは、身悶えするほど強い。しかし、それが何かがわからない。私自身にも、そういう時期があった。

私たちには、「職業選択の自由」がある。しかし、それは同時に、^③「職業選択の義務」でもある。なぜなら、私たちの社会は、必要に応じて様々な機能分化し、誰かがその役割を担わなければ、不都合だからだ。農業や漁業の後継者問題がよく取り沙汰されるが、農業や漁業に向いている人は、農業や漁業をしてもらわなければ困るのだ。

え

そして、この義務を果たさない人間の「個性」を、社会はなかなか承認してくれない。社会的な分業の一環として、それは、役

に立ってない個性だからだ。

夏目漱石は、「私の個人主義」という有名な講演録の中で、こう語っている。

「私は始終中腰で隙すきがあつたら、自分の本領へ飛び移ろう飛び移ろうとのみ思っていたのですが、さてその本領というのがあるよううで、無いよううで、どこを向いても、思い切つて、^④やつと飛び移れないのです。

私はこの世に生まれた以上何かしなければならん、といつて何をして好いか少しも見当がつかない。私はちやうど霧の中に閉じ込められた孤独の人間のように立ち竦すくんでしまったのです。」

学生時代の私が非常に共感した一節だ。

それでも何とか、やりたい仕事が見つかったとする。ところが、私が大学を出る一九九八年、九九年ごろは、元々大学生の数が非常に多かったにも拘らず、バブル崩壊後の不況のせいで、就職超氷河期だった。職業を通じて自己実現し、社会の中で十全に個性を発揮して生きたいと思っていたのに、自分の希望通りの職業につけないという人が続出した。これは、今日でも多く見られる事態である。

※アイデンティティを考える上で、社会的な属性は大きな意味を持っている。自分の個性を、社会が役に立つものとして、認めてくれている、という意味だからだ。

しかし、社会の中に居場所が見つけれないまま、「個性的に生きなさい」という、例のお題目だけが心の中に残り続けている状態は、非常に苦しいものだ。職業＝個性だと考えると、不本意な仕事をするにも抵抗がある。そんな仕事をするのは、「本当の自分」ではない気がする。だからこそ、かりそめにバイトなどで食いつなぎながら、いつか「本当の自分」の「個性」が発揮出来る仕事をしたいと夢見る。

漱石の先ほどの講演には、後段、次のような一節がある。

「ああここにおれの進むべき道があった！　ようやく掘り当てた！　こういう感投詞を心の底から叫び出される時、あなたがたは始めて心を安んずる事ができるのでしょう。」

アイデンティティの動揺は、時代を問わず、誰もが成長のプロセスで経験する。「私って何？」という自問を、一度もしないまま大人になる人はいないだろう。そして、それが定まらないというのは、恐ろしく苦しい。振り返ってみても、将来がまったく漠然としていた私自身の大学時代も、何とも言えず暗かった。

漱石の言う通り、自分の「個性」を発揮できる仕事に就ければ、その動揺はある程度鎮まるだろう。

他方、仕事に不満でも、消費を通じて自分のアイデンティティを確認するという方法もある。自分はどんな車に乗っていて、どのブランドの服を着ていて、拘り抜いたこんな家に住んでいる。これが、自分という人間だ、と。

しかし、経済状態の悪化は、その両方の可能性を圧迫する。アイデンティティ・クライシス自体は近代以降のへ B 的な現象だが、それが過剰に煽られる時代もある。

ネットを通じての活動は、そのいずれでもない方法で、今日、私たちのアイデンティティの安定に寄与しつつある。しかし、まだそれも手探り状態だった二〇〇〇年前後には、雑誌の特集などで「本当の自分」というキーワードがやたらと目についていた。

そうした中、私の世代に最も多く見られた現象が二つあった。

「引きこもり」と「自分探しの旅」である。

引きこもりは、対人関係をいっさい遮断して、文字通り家に引きこもることである。実家にいるのかどうか、近所のコンビニ程度なら出かけるのか、ネットでは人と交流があるのか、色々なケースがあるだろうが。他方で、「自分探しの旅」は、へ C 的には海外に行つて、まだ知らぬ人々との交流を通じ、「本当の自分」と出会おうとすることだ。

片や内向きのベクトル、片や外向きのベクトルと、方向性としては真反対である。しかし、両者には共通点がある。いずれも、

この日本社会の中に居場所を見つけられない、というところだ。

引きこもりは、しばしば、単なる甘えだとか、社会性の欠如だとかいった、批判の対象とされた。また、自分探しの旅は、「自分^⑤はここにいるのに、いったい何を探すんだ？」と、へんな夢でも見ているように揶揄された。

しかし私は、ここまで語ってきた通り、こういう現象がなぜ起きているのか、痛いほどにわかる気がした。

アイデンティティが不安定だからこそ、「かりそめの自分」に翻弄^{はんろう}されたくない。漠然としているからこそ、確固とした「本当の自分」を追い求める。

引きこもりや自分探しの旅は象徴的な現象だが、この願望は、真綿で首を絞めるように青年期の人間を苦しめる。

夢を持ちなさい。自分が本当にしたいことは何か、よく考えなさい。そのためには、「本当の自分」を知らなければならない。その自己を社会的に実現するのが職業だ。目標に向かって努力している人は立派だ。目標も持てない人間は、人生に対する真剣さが足りない。……

(中略)

実のところ、私が大学生の頃までは、まだポストモダン・ブームが辛うじて続いていて、主体性の解体が論じられ、ここに記した「本当の自分」への拘りなど、まったくへ D 的で、時代錯誤な悩みとされていた。

その手の本を、実際にどのくらいの人を読んでいたのかはともかく、俗流の手軽な説明として、当時よく語られていたのは、人間は桃ではなく、タマネギなのだ、といった話だった。桃は真ん中に種がある。そんなふうに、人には確固とした自我(「本当の自分」)があり、主体があるように思われているが、実は、タマネギの皮のように、偶然的な社会的関係性や属性を剥ぎ落としていった先には、何も残らない。つまり、「本当の自分」などないのだ、と。

しかし、大学生の私は、そんな理屈を幾ら聞かされても、まったくありがたくなかった。むしろ、強い嫌悪感を覚えていた。じゃあ、現にこうして感じ、考えているこの俺は一体何なのか？ それに、将来の職業のことは、やはり切実だった。

★私は森鷗外が大好きだが、彼は「仕事」を必ず「為事」と書く。「仕える事」ではなく、「為る事」と書くのである。私はこの発想を気に入っていた。人間は、一生の間に様々な「事を為る」。寝て起きて、食事を摂って、本を読んだり、映画を見たり、デートをしたり「為る」。職業というのは、何であれ、その色々な「為る事」の一つに過ぎないが、ただ、一日二十四時間、死ぬまでの何十年だかで、最も長い時間を費やす事であるには違いない。だからこそ、自分の本性とマッチしたものでなければ、耐えられないはずだ。

(平野啓一郎『私とは何か「個人」から「分人」へ』より。ただし、見出しを省略した。)

※アイデンティティ…自己同一性。自分が自分であるということ。

※ポストモダン…近代以降。近代を乗り越えようとする態度。

問一 本文中には、次に示す一文が脱落しています。この文が入る箇所を あ え の中から探し、記号で答えなさい。

にも拘らず、その個性がわからないというのは、いつでも煩悶の種だ。

問二 本文中のへ A ヲ D ヲにあてはまる言葉をそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。(記号は一度しか使えません)

ア 普遍 イ 典型 ウ 反動 エ 適合

問三 — 線部①「念仏のように聞かされていた『個性』という言葉は、まったくもってうっとうしかった」とありますが、これはどのようなことを意味していますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「個性」が大事だと何度言われても、その意味するところがよくわからなかったため、うんざりしていたということ。

イ 「個性」は何度説明されてもよく意味が分からない言葉であったが、周囲の人々はよく理解していたため、焦りを感じていたということ。

ウ 「個性」という言葉の意味はよくわからなかったが、学校の先生が言う言葉であるから、尊重せざるを得なかったということ。

エ 「個性」という言葉の意味は十分にわかってはいたが、あまりにも繰り返しその意味が説かれるため、反発していたということ。

オ 「個性」は古くから伝わっている言葉ではあったが、自分にとっては重要なものではないと判断したため、無視していたということ。

問四 ――線部②「職業の多様性は、個性の多様性と比べて遥かに限定的」とありますが、このように言える理由を説明したもので、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 職業は、社会の需要によって成立するものであり、個性を生かすために作られるものではないから。
- イ 職業も個性も無限に存在するものであるが、両者は完全に対応しているものではないから。
- ウ 科学技術の進歩により職業の数が減少しているのに、個性の数は増え続けているから。
- エ 世にある職業のうち、本当に人間の個性を必要とするものはごく限られているから。
- オ 職業は、当初は人間の個性を生かすために存在していたが、次第に個性の多様性のほうが勝ってきたから。

問五 ――線部③「職業選択の義務」とはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 何の職業にも就いていない人間を生かしていきけるほど、現代の社会には余裕がないということ。
- イ 世の中にある多くの職業の中から、自分の能力に見合った職業を選び取らなくてはならないということ。
- ウ 人間社会を成り立たせるためには、人は何らかの職業に就いて働かなければならないということ。
- エ 人間はどんな職業に就いてもよいが、就いた以上は必ず最後まで勤め上げなければならないということ。
- オ 人間は働いて得た給与から税金を納めないと、国家が破たんし、生きてはいられないということ。

問六 ――線部④「やつと」と同じ意味のものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 立っているのがやつとで、歩くことさえままならない。
- イ 父が美術学校の先生になってから、やつと生活が当り前に出来るようになった。
- ウ この老紳士の顔をどこで見たか、やつと思ひ出す事が出来たのである。
- エ 自分はその間やつとの事で、不愉快の念を抑えていた。
- オ おれは、やつと掛声をして、荷物を持ち上げた。

問七 ――線部⑤「へんな夢でも見ているように揶揄された」とありますが、これはどのようなことを言っていますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 「本当の自分」をいまだに見つけられない「自分」は、社会から一人前の人間として扱われなかったということ。
- イ 働きたくないために「本当の自分」を探すことへ逃避しようとする「自分」の姿勢が見下されていたということ。
- ウ 多くの人々にとって「本当の自分」は自明のことであつたから、それがわからない「自分」は冷笑されていたということ。
- エ 「自分」以外の「本当の自分」など存在するはずもないのに、それを追求する姿が滑稽であるためにからかわれたということ。
- オ 「自分」は唯一無二の存在であるのに、突如「本当の自分」を探すなどと言ひ出したために失望されたということ。

問八 筆者は「仕事」とはどのようなものだと考えていますか。本文中の★以降の文章の内容をふまえて、五十字以内で答えなさい。（句読点・符号も一字と数えます）

問九 本文に書かれていることを、次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア いくら裕福な生活をしていても、自分に適した職業に就いていなければ、自分の存在を社会に認めてもらうことは不可能である。
- イ 親が農業や漁業に従事している者は、自分のやりたい職業があつたとしても、みずからの個性を生かすために家業を継がなければ、後継者問題は根本的に解決しない。
- ウ 個性とは本来は誰もが持っているものであるが、それを生かせる職業がなかなか見つからないため、一時的にアルバイトをして生活の糧を得ることがある。
- エ 自分のやりたい仕事が見つからなくても、我慢してその仕事を続けていくことで、やがて自分の個性として社会から認められることになる。
- オ 学校で個性が重んじられるようになって以来、現在では詰め込み式の画一的な教育は行われなくなったが、その結果としてルールから逸脱する生徒が増えてしまった。
- カ 働いて得た対価を自分の欲求のままに使うことで、たとえその職業に不満を持っていたとしても「自分とは何か」という不安を解消できる人もいる。

五

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

一

十一月の加茂の臨時の酉の日の祭には、[※]上達部や殿上人が車でへ A 〱 やつて来たり、舞台が出来て綺麗に粧った舞人達がその衣の袖を被いだり何かするので、京中の見物人がそこにも此処にも巴渦を巻いて、^①その賑やかさと云つたらなかった。それに午後は勅使がやつて来て、弓や胡録を負った隨身のあとから騎馬の侍が大勢ついてやつて来たりするので、あたりは一層賑やかになった。夜は簀が空を焦し、鼓や笛の音が葉の落ちた林の中に響いて聞かれた。

② その時分には、もはや京の北山には雪が白く、露も霜と変つて、社頭をめぐって流れている加茂の河水も一条の錆色納戸の布でも流したかのように、さびしく細く流れているのを誰も眼にした。岸には枯れた萱やら薄やらがへ B 〱 夕暮の風に動いていた。

『賑やかになったのう……。臨時の酉の日の祭りでも……。？』
『ほんのう……。夏の祭にも多く譲らぬようになった。』

『それはのう……。夏の祭には及ばぬが、何と云うても賑わしゆうなつた。今年は勅使は内のおとどかな……。』
『さようで御座るな。もうさつきにそこにおじやつたで、もはや上加茂の方へ御出ででがな御座ろう？』
と、揉烏帽子をつけた、長いこと陪従でもしたことのあるらしい老いた一人は、

『いや、まだそこにおじやる……。今、そこを出たばかりじゃ。』

成ほど此方から見ると、その勅使の一行は、その下加茂の社頭で思いもかけず暇を取ったというように急いで向うに並んで通つて行くのが見えた。そのあとからは網代車や糸毛車がへ A 〱 続いて、その向うに夕日が明るく野を照らしているのが見えた。鼓や笛の音が賑やかに社頭の其処此処に湧くようにきこえた。

年を取った人達が大勢そこに集まっていたが、その中でもことに老いた、何うしても百歳を遥かに越したと思われる一人の翁が、長い白鬚を撫でながら、何か言おうとして、しかし少し躊躇していたその隙を奪って、その傍にいた、もう一人の、これもかなりに老いているらしい揉烏帽子の翁が言った。

『それにしても、おぬしは、この身などよりは余程上で御座ろうな？』

『さよう御座るな。』

白鬚の翁は笑いながらこう言ったが、直ぐ問い返した。

『おぬしは？』

『この身で御座るか。この身は百歳を十一出ておりますが……？』

『は、それでは、この身の方がずっと先きじゃ。』

『さよう御座ろうな。この身も、大抵なところでは、年では、ひけを取らぬのじゃが、おぬしには及びそうもない……。それにしても、おぬしはいくつにならる？』

『もう年も忘れたくらいじゃ。』白鬚の翁は笑って、『寛平の御門の母后の宮の召使で御座るで、もうかなり年を経申した……』

『寛平の御門の母后の宮！ お、それでは古い！』

揉烏帽子の翁に限らず、そこにいる老いた人達は、皆なこう言つて驚いたように其方を見た。

『では、もはや百五十にも？』

『百五十に五つか六つ出ていることで御座ろう。何うも、年老いて、そのけじめははっきりせぬようになった。但し、こういうことは存じ居る。この臨時の祭を神が御門に乞うた時を存じて居るが、その時七つで御座った——』

『臨時の祭を神が御門に乞うたと申すと——？』

比較的若い、と言つても、八十二三の翁が問うた。

『おぬしは知らぬか。ある日の午後、寛平の御門がまだ侍従でいらせられるころ、此処等あたりを狩りに出ておられると、急に日がくろうなつて、ひよつくりそこに一人の翁があらわれたという話を——』

『存じ申さぬ——』

『そうかな。存じ居らぬかな。名高い話じゃが——？』

『あ、聞いたことはある。この加茂の臨時の祭の話？』

もう一人の九十ばかりの小づくりの翁が言った。

『そうじゃ、その話じゃ。』百五十七歳になったという翁は、さも得意そうに、『その、ひよつくりあらわれた翁が、この加茂の神じゃったのじゃ。そしてそれが御門に申すのには、この身はこのあたりに住む翁じゃが、何うも冬はさむしゅうてならん。何うか祭なりと賜われ！ こう申上げたじゃ。ところが寛平の御門は、聡明な親王であらせられたほどに、それとすぐ推し奉つて、でも、それはこの身では叶い申さぬ。叶う人に申上げられたいと言つた。すると、翁は、いや、叶う方だから申上げた。もはややうなる時も近い。……と申して、掻き消すぐとく消え去つたと申すじゃ。丁度その日が酉の日で御座つたので、それでこの臨時の酉の日の祭が始まつたのじゃ。寛平の御門は位に即かれたそのあくる年に、この祭を始められたので……』

『あ、そういうことも満更きかぬではなかったが——』

『それを、その日のことを、この身はちゃんと覚えておる。』

『それはまためずらしい……』

『前にも言うたが、この身はその時七つじゃった。丁度その頃、この身の親の住んでいたところは、そら、皆人も古い人は知つて御座ろうが、大炊の御門からは北、町尻からは西、つまり小松の帝が親王でいらせられた時の御所の塀の此方のところに住んでいたの、あそこいらでよう遊び居つた。この時も何でもそこで遊び居つたのじゃ。そうじゃな。元慶二年じゃと思うが、小松の

※上達部や殿上人…どちらも政治の中心を占める上級役人。

※勅使…天皇の仰せを伝える使者。

※胡録…矢を入れて背中におう武具。

※隨身…供人。

※陪從…身分の高い人の供人。

※網代車や糸毛車…どちらも牛車のひとつ。

※寛平の御門…宇多天皇。

※大炊の御門…場所を示している。

※小松の御門…光孝天皇。

※元慶二年…西暦八七八年。

※未の刻…午後二時ごろ。

※申の刻…午後四時ごろ。

問一 本文中のへ A へへ D へに入る言葉として適当なものを、それぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。(記号は一度しか使えません)

ア ガサコソと イ ぼんやりと ウ ぞろぞろと エ はつきりと

問二 ―線部①「その賑やかさと云ったらなかった」の言い換えとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア たいへん賑やかであった。

イ いくらか賑やかであった。

ウ 少しは賑やかであった。

エ 少しも賑やかでなかった。

オ 全く賑やかでなかった。

問三 ―線部②「その時分」とはいつのことか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 簀が空を焦し鼓や笛の音が聞かれるころ。

イ 勅使が隨身や騎馬の侍をつれてやって来るころ。

ウ 上達部や殿上人が車でやって来るころ。

エ 舞台が出来て舞人達が準備をはじめめるころ。

オ 加茂の臨時の酉の日の祭が開かれる十一月ころ。

問四——線部③「夏の祭」として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 葵祭（賀茂の祭） イ 時代祭 ウ 祇園祭（祇園会） エ 三社祭 オ 新嘗祭

問五——線部④「翁」とありますが、この翁はこの時点では何歳だったのか。算用数字で答えなさい。

問六——線部⑤「青侍」と同様の意味で「青」という言葉を用いているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 青写真 イ 青天井 ウ 青二才 エ 青海苔 オ 青物市

問七——線部⑥「打壊した」のは何ですか。適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 老人達の会話

イ 祭全体の盛り上がり

ウ その場の雰囲気

エ 白鬚の翁の誇らしげな気持ち

オ 白鬚の翁の話

問八——線部⑦「白鬚の翁は、さびしそくに……」とありますが、この時の翁の気持ちを説明したものとして最も適当なものを

次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 若い人達に自分の話を理解されないことを残念に思うが、反論してみたところで仕方がないのであきらめた。

イ 若い人達にわかってもらえないことを物足りなく思うが、自分の言い方では伝わらないので断念した。

ウ 若い人達に猛反発されたことを不満に思うが、いくら言ってもわからなかったので言うのをやめた。

エ 若い人達に少しでも耳を傾けてもらえたことはうれしいが、世代の差を痛感したので黙りこくった。

オ 若い人達に老人達が反論しないのを心細く思ったが、どうせ若い人たちに言い負かされるから話をやめた。

問九——線部⑧の中で、「翁になってあらわれて来た」「加茂の社の神」はどのようなお願いをしたのでしょうか。本文の内容をふまえて、「～と願いました」につながるように二十字以内で答えなさい。（句読点・符号も一字と数えます）

問十——線部⑨「あやしの天気」をあらわした部分を本文中から探し、その始まりの一文の最初の五字を抜き出さない。（句読点・符号も一字と数えます）

問十一 Ⅱ線部Ⅰ「かれ」、Ⅱ「かれ」とは、それぞれ誰のことですか。その組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|---|-----------|------------|
| ア | Ⅰ 世継 | Ⅱ 少年時代の世継 |
| イ | Ⅰ 世継 | Ⅱ 侍従の殿 |
| ウ | Ⅰ 世継 | Ⅱ 世継の友だちの童 |
| エ | Ⅰ 少年時代の世継 | Ⅱ 少年時代の世継 |
| オ | Ⅰ 少年時代の世継 | Ⅱ 世継の友だちの童 |



問五

四

四

50

D

問四

問八

と

お願いした。

問十一